THE
JAPAN
INTERIOR
DESIGNERS'
ASSOCIATION

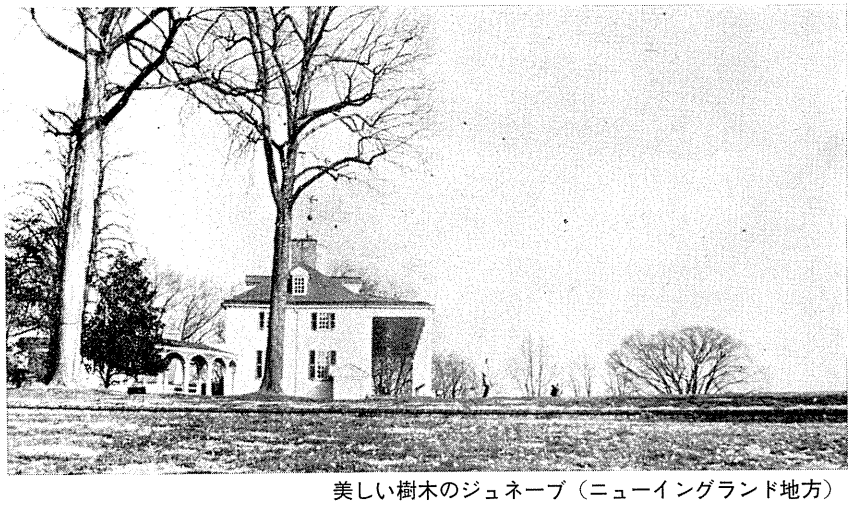
インテリアデザイン

U・S・A

内堀繁生

13年後のコネチカット，ゼネラル，コネチカット，マサチューセッツなどアメリカ東部の6ツの州はニューイングランドと云う名称で呼ばれているが，この地方にはコロニアル風の建物がいまだに点在してたりして，大変うつくしい自然の姿を見せている。↗

ニューヨークから車で3時間，コネチカットのはずれにハートフオード（Hartford）と云う都市がある。コネチカット州の首都であり，アメリカの大きな保険会社のヘッド・クオーターが15社以上もあつまっているまちである。↙

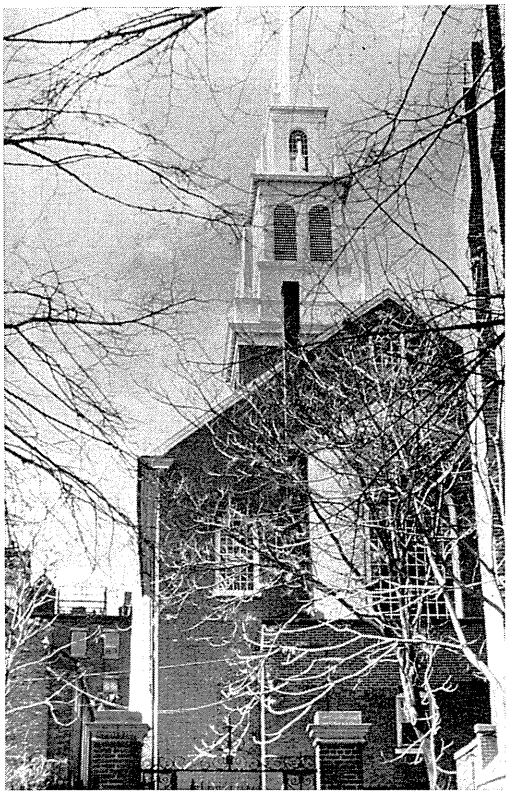


美しい樹木のジュネーブ（ニューイングランド地方）

ワシントンが政治のまち，ピッツバーグがスチール・インダストリーのまちとすれば，ハートフオードはさながらインシュランス・シティとして知られている。

起伏にとんだなだらかな土地には，灌木の林が広がっていて限りなく美しい，ダウンタウンからかなり離れた郊外にコネチカット・ゼネラル・インシュランスのヘッド・クォーターがあり森と林の中に青いガラスの3階建のすがたで建っている。

建築はSOM，インテリアはノル・プランニング・ユニット，庭園がイサム・ノグチの設計で，1957年に完成されたものである。建物はワン・フロアーの広さが約1000坪で，そのなかに6ツの中庭をもっているので，どのオフィスからも外の美しい景色が，中庭造られた自然を望



コロニアル風教会（ゴネチカット）

●事務局員紹介・編集後記・12
●住宅産業研究開発委員会発足！・10
●ヤマギワ国際照明器具コンペ，70について・8
●綱領の確立と生きがいの体制を・7
●樋口氏講演メモ・6
●インテリア講演会を終えて・剣持氏講演・5
●インテリアデザインU・S・A・1

no.7——vol.45

むことが出来るようになっている。

グランド・フロアー南側にはり出したテラスの先には，かなり大きな池があって，そのまわりは丁度日本の廻遊式庭園のように散策出来るようにアレンジされている。イサム・ノグチは多分日本庭園からのヒントで之を計画したものと思われる。

この建物は，ダウンタウンからずっと離れたところにぽつんとひとつだけあるので，ここで働く3500人の従業員のためのラウンジやストアー，カード・ルーム，バーバー・ショップ，キャフテリア，はては地下室に，ボーリング場から劇場までもっていて，あたかも小さな街を内蔵しているようなプランニングである。

この建物でもっとも特長のあるのはパーティション・システムである。

天井はデッキプレートむき出しの下に，木製のルーバーが600と1800のモジュールで設置されており，このルーバーの下にはどこにでもパーティションをもってくることが出来るようになっている。

企業の発展にともなって組織が変ったり，従業員が多くなったときには，オフィスのスペースを移動したり，広げたりすることが簡単に行なわれるようなフレキシビリティーがこのシステムによって与へられているわけである。パーティションは規格化されていて，簡単にとりはずしが可能であることは云うまでもない。

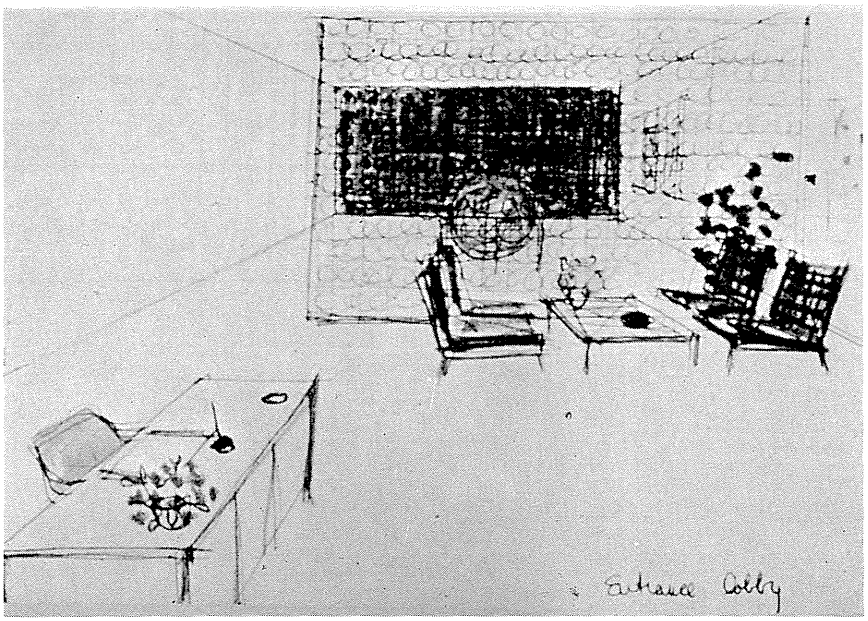
先に述べた木製のルーバーは，同時にサウンド・コントロールをするための大切な役割りも果している。

最近のアメリカのオフイス・インテリアで，ようやく実用段階に入ってきたシステムにオフイス・ランド・スケーピングがある。

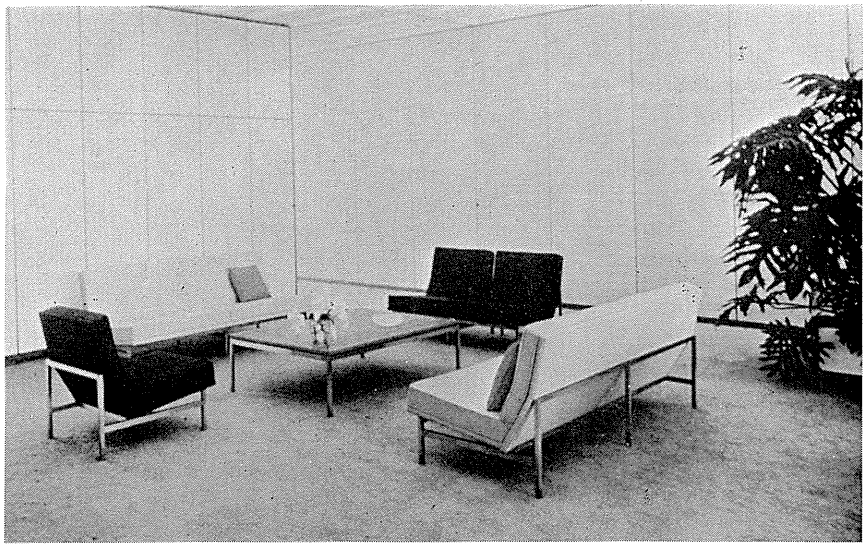
このシステムを簡単に述べると，スペースにフレキシビリティーをあたへるために，パーティション・ウオールで部屋割りをせずに，オープン・スペースをファニチュアーやスクリーン，植木などでレイアウトをし，個人的な事務スペースは限定するが，原則としてオープン・オフイスとする概念である。

建築的には，

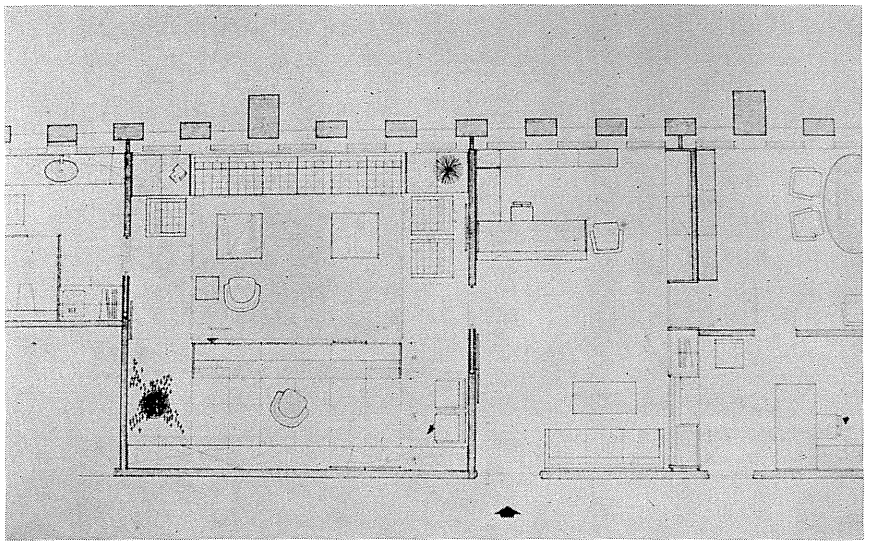
(1) オフィス・ランドスケーピングは，



ロビーのスケッチ（フローレンスノル）



コネテカットゼネラル エグゼクティブロビー
（S.O.M. ノルプランニング ユニット）



ウエスティングハウス
エクゼクティブオフィス

大きなスペース程ベターである。

(2) 音響的にはすべての音の70%を吸収するのが現想的であり，湿気を保って，音の波を拡散する方法を考慮する。

(3) 照明は部屋のすみからすみまで均一にする。

(4) 電話と電気のフロアー・システムを考慮する。

などの点に留意する必要がある。

このシステムが成功するかどうかは，結局レイアウト，音響，エアーコンディショニングそして照明の4ツのファクターにかかってくるわけであるが，こんにちこのオフィス・ランドスケーピングで最も大切な音響の問題が，13年前のコネチカットゼネラルの建物で見事に解決されているのは興味深いことである。

ニュー・イングランドの美しい自然のなかに建っている3階建のひくいストラクチュアー，パーティション・システム，サウンド・コントロール，ライティング及びファニシングなど建物内外のかんきょうと自然とが見事に統一されていて，トータル・デザインの素晴らしい勝利をうたっている建築である。

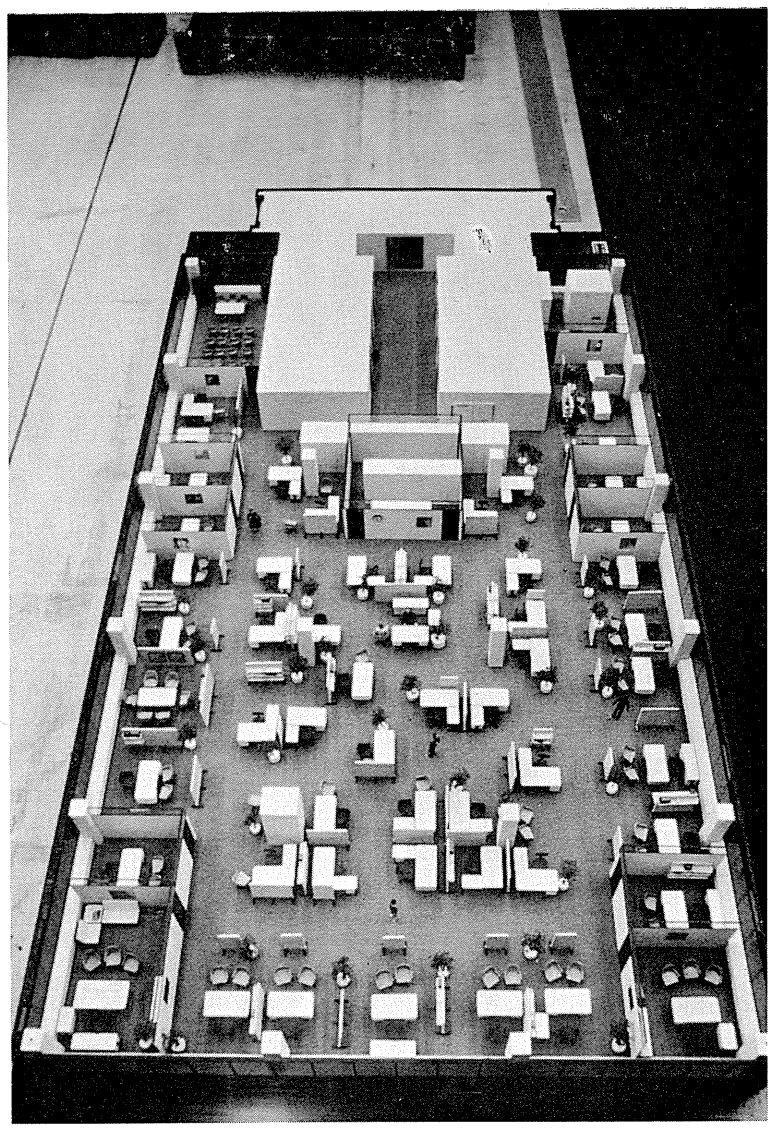
建築家とインテリアデザイナー

コネチカット・ゼネラルの場合は，建築プロジェクトの最初の段階からデザイナーが参加していたわけである。

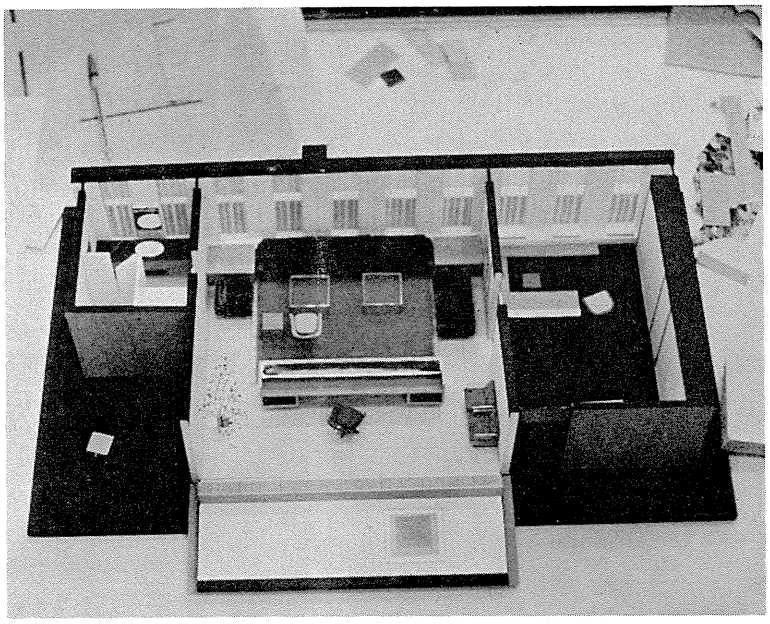
このような場合には，デザイナーから提案される家具のスタンダードやオフイスのスペース・スタンダードをもとにして建築モジュールがきめられ，プランニングが協働作業として行なわれてゆくわけである。つまり建築プランニングの最初からデザイナーが仕事をしてゆくめぐまれたケースである。

その外の場合は，殆んどのプロジェクトがクライアントから直接くるケースが多く，建築事務所からはストラクチュアーと設備コアーだけがきめられた図面が来て，そこからインテリア・デザイナーの仕業が始められるわけである。パーティション・プランニング，オフイス・ルームのレイアウトからフアニシングまでの作業がシステマテイックに進められる。

プロジェクトの内容は次の如くであ



O. C. F オフィスランド スチーピングモデル
（ノルプランジング）



ウエスティングハウス
エクゼクティブオフィスモデル
（ノルプランニングユニット）

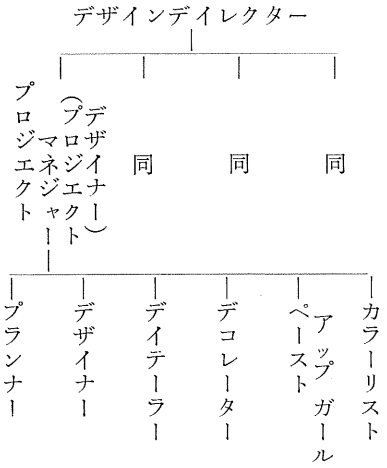
る。

スペース・プランニング
インテリア・デザイン
ファニチュアー・プラン
ライテイング及びシーリング
ファニチュアー及びファニシング
カーテン及びカーペッティング

そして全体のカラースキームやグラフイク及びアート・プログラムとしての絵画，彫刻などの計画，アクセサリー植木などのプログラムまで綜合的に行なわれる。

スタッフ・オーガニゼーション

アメリカのインテリア・デザイン・テイームの編成は，事務所によってかなりちがうし，又ひとつひとつのプロジエクトによってもことなるが，一般的には下記のような編成になることが多い。



デザイン・デイレクターは，全体を統括しながらそのプロジエクトのデザイン目的やコンセプトを決定する最高責任者である。又プロジエクト・マネジャー（又はプロジエクト・デザイナー）はそのプロジエクト・ティームの最高メンバーのひとりとして，プランニング，インテリア・デザインの一般的な調制をする，同時にクライアント側のスタッフ（担当者）と一諸にプロジエクトの最初から家具の納入インストレーションまでをコーデイネートするわけである。

しばしば，プロジエクト・マネジャーは，いくつかの仕事をだぶってもっており，各々のプロジエクトのためにそれぞれティームを編成して，プランナー，デザイナー，ディテーラーなどの必要スタッフをティームに参加させるわけである。

グラフィックパネル

ノルニューショールーム
（ゲオオーレンティノルプランニングユニット）

ノルショールームプラントプログラム
（ノルプランニングユニット）

インテリア講演会を終えて

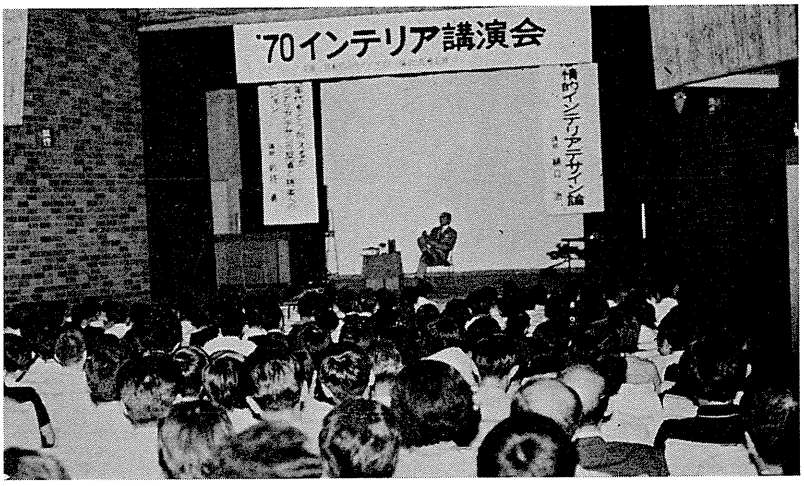
月例会報告

時は6月27日梅雨期の最中であるだけに，当日の雨降りは講師，聴衆何れが欠けてもお手上げと思い，未だに天候に支配される人間の無力さを感じながら，好天のみを祈りつつ当日を迎えた。天候は晴れ。剣持，樋口両講師もコントラスト絶妙の講演，聴講者も福岡市民会館小ホール(定員350)が殆んど満席となり，盛会裡に講演終了し，更に支部会員との懇談会も無事終り，ホットした。

樋口氏の心情的インテリアデザイン論では聴衆を静かに傾聴させ，剣持氏の講演はアクションとカセットとスライドを用いて，適時甘，辛味料を入れてリラックスに当地聴講者を喜こばせ，有料講演会のコケラオトシとしての九州公演は華々しく成功したこと。

詳細の報告は次回にさせて頂きますが剣持，樋口両氏遠路の御講演，本部の御支援厚く御礼申し上げます。尚九州支部会員数名は当日聴講も出来ず，裏方仕事で一致協力の実績を上げ得ましたこと喜びと感謝ひとしおです。

九州支部　坂本康四



剣持氏講演

一昨年の秋明治100年を記念して1870から1970の間に目ざましく近代化した日本で国連機構ユネスコのゼミナールが東京，京都で行われ，文学，演劇，音楽，建築 design の部会の中から今日のお話をしたい。

現在の日本には西洋にあるものは殆んどある。オートメーションその他ないものはない。日本は Not For East Country で for west country と云われる。日本が honourable white と云われること等は問題じゃない。ないものは巨大な人殺しの核装備だけである。たった100年の間にチョンマゲ時代から斯くも発展した日本を，昨夜のレコードからまとめた音楽を，先づ聴いて貰いたい。

今日は寄席です。気楽にして下さい。

暗転!!　汽車の音—駅 noise —鉄道唱歌—天然の美—荒城の月—君恋し—祇音小唄—江差追分—茶摘み—会議は踊る—(my fair lady より) 踊り明かさう—(hair より) 輝く星座!!　**明転**

こうして現代に到る。西洋のもので日本にないものはない。そして日本は混乱の時代を迎えている。Economic animal と云われるほどの執ようによって国民生産は世界2位，国民所得では22位と云う情ないことです。しかし，一流のドクターカーンの予測によれば1969年のアメリカの生活水準に達するのにあと15年と予測されている。

独，仏，英でも同様の予測をしている。20年後の我々日本人の居住面積は1人で6畳位の space 1家族当り30坪と云うことになる。我々の居住 space が大きくなることに間違いない。同時に働く時間が少くなり，休む時間が長くなる。ヤッペの話では1年のうち200日は休み165日が働く日と云うことになる。

レジャーの社会で情報化社会が必要となる。情報化社会とは design 化社会と云って云い。日1日とそうなりつつある。そうした中で design の責任は重大となる。強くなければいけない。これからは designer が頭になり機械が手足になる。designer が頭にならなければ情報化社会はよくならない。

この状態の中で日本のインテリヤは大きく分けると institutional なインテリヤ，2番目に結婚式場，寺院，映画館にインテリヤがある。3番目に housing のうち mansion にインテリヤがある。働く人の住宅にはインテリヤはない。インテリヤは我々の庶民住宅が向上しなければならない。

日本人の文化は合理化され，材料美を極限まで生かして来た江戸時代からの伝統がある。漆陶器竹細工等外国か

ら自が学びえを吸収して追い抜いた天性を持つ。技能オリンピックに於てもいつもトップである。日本人は器用である。そのため素人がなんでも自分でしょうとする欠点となる。外国では専門家に任す。日本でも専門のデザィナーに任せなければいけない。専門家に任せれば日本は世界に負けない。技術は進歩するが技術に使われないで技術を駆使しなければいけない。

もう一つ大事なことは我々は自分でなければいけない。自分を大事にし自分の好きなようにやることが大切である。但し下手でなく上手である場合にである。自己を精一杯出すことである。

我々には伝統がある。技術を駆使するデリケートな神経をもった伝統がある。

そう云う意味で70年代のデザィナーとして立ち向おうじゃありませんか。

両氏のお話は3時間以上になり抜き書きの為御不満の点を御許し下さい。

（速記録より）　九州支部　坂本記』

樋口氏講演メモ

今日の私の演題は心情的インテリヤ，デザイン論ということでございます。心情的というのは心の中と云うことで私のインテリヤデザインの心情をお話して皆様のお役に立てば幸と存じます。

丁度34年前，昭和11年百貨店の室内装飾設計部に入りました当時は日本の黄金時代で，日本は300年の鎖国時代から，明治に入り欧米の文化が入って来て以来富国強兵と共にそれを受け入れて以来当時は急速に延びつつあった時代でありました。

その頃は万博とオリンピックを一度に迎えようとした時代で，百貨店が木工会社を持ち日本のインテリヤの翼を荷っていたが，マイナス面としては営業成績を上げるために，下手に出なけりやならないことでした。

当時既に隆々たる建築家に対してぶつかっては建築家が主体性を持つようになっていたため，建築とのぶつかりをさけて船舶車両のインテリヤに情熱を傾ける傾向を生じた。

私としても船の仕事，車両の仕事で質のいい良い仕事が出来，インテリヤデザインが空間を与えられて自由に，存分に仕事をすることが出来た。それが25年前終戦と共に船はなく都市での住空間は殆んどなく，どん底の状態から復興の時代となる頃，建築士法が生れた。一人の建築家を建築家として認めるのは国家が認めることになった。大学を出ても国が認めなければ建築家とし認められないことは私としても矛盾を感じることもある。

インテリヤの方は大きく分けて1つはインテリアプロダクトデザインと，もう1つは，空間デザインになるが，空間に及ぶときにどうしても建築全体を手がけなければやり難い。その故か生産品を手がけ，生産単品て於て多くのグットデザインを生んで来た。

戦後の困窮時代から脱して来ると共に欧米からの生産品が入って来るようになり，世界観から見る目が拡がって来た。量産の生産品が発達し普及し過剰となるに及び，個と云うものが尊ばれるようになった。マスコミの海に溺れる人々が個の生活を楽しむことが出来るのはインテリヤに於てのみとなった。異様なものへの憧れが芸術の世界に表れたのは，量の世界，科学の世界から人間解放を求める結果，サイケデリック，カレージイ，ヒッピー等として表はれて来た。

デザインの世界ではグラフィツクからインテリヤにまで入って来た。インテリアでは北欧デザインからイタリア，スペインの自由本倣なものへの変化が見られるようになって来た。

もう一つホツトに対してクールなものが新しい傾向となって表われて来た。カプセルの空間は今日まで経験のないもので，コンピューターエレクトニクス等が表れ，人間が機械と対立して行く訳には行かない例としてニューヨークの新しい機械展によると人間機械の表現が色々と見られる。グットデザインは優等生の答案。之を否定する奔倣なもの。

非常にクールなコンピューターと結合した空間，万博がインテリヤの面で色々と示唆している。エンバイロンメントは人間がその中にとけこんでいくもので，お祭り広場の大屋根はエンバイロンメントとして作られている。

万博の企図するものを追求すれば新

しい理念が出ている。私の過去からこれからの新しいインテリヤデザインの分野を考えるとき広範囲，複雑多岐に互りエレクトニクス，テクノロジーのエキスパートも加えることが必要となって来ている。ともかく急激に過去に於けるインテリヤデザインと建築家との対立はなくなり，本当のインテリヤは未来の生活空間を作り上げてゆく上に全く変貌し，私のインテリヤデザイナーとして頑張って来た時代は非常にのんびりしたもので今後はものを大きくもっと広くなる。

プレハブも唯ガワだけは出来ているが，インテリヤについては未だかたまってもいない。之をかたまらせるにも新しい巾広い概念を力強く反映して行かなければならないと考える。

心情的インテリヤデザイン論として論旨が通らなかった点もあるかと思いますが私の気持をその儘お話し申し上げた次第です。

綱領の確立と生きがいの体制を

——協会に何が可能か——

今日の大きな課題の一つとして，戦後生れの若い世代にどう対処すべきかが問われ，これを契機として今日の社会の在り方，各種団体の姿勢にも多少のズレがあらわれてきております。

このような時点にあたって，協会のもつべき思考の主体制確立のためにも，ここにいくつかの疑点を問いかけてみたい。

それこそ，今日的な意味における人間の快適な生活空間の創造に関与する団体である以上，70年代にむかって大仰にいえば，より一貫した独自の政策観なり思考の主体的な軸となるべき理念なり綱領を体得しておくべきではなかろうか。

たとえば，昭和21年から30年の10年間に生れた人々が，今日，わが国には約24万人いる。また，アメリカでも15才～24才までの人々が約345百万人にも達している。これは，いずれも全体の人口に占める割合は，20%前後にもなっております。

そして，これらの人々は70年代の間に，20代から30代の前半の年令となり，今日の社会に重大なインパクト（衝撃）を与えることになってくるといわれています。

もちろん，現在，すでにこれらの若い世代は，昨今の大学問題その他の社会的な焦点の主役として登場してきております。

そうして，問いかけられる今日の問題点はともかく，彼らのもつ鋭敏な動物的な感覚で現代の数々の不安やジレンマを感じとっている点でありましょう。

たとえば，それらの多くは，

(1) 単に人口群として量的に大きいだけでなく，全く新しいタイプのマーケット（欲求の質のちがい）であることといわれている。

それは，これら若い世代の人々の考え方，生活態度には，古い世代の人々に容易に理解できない面が少なくないことであり，これこそ，世代のギャップであるといわれています。

(2) 経済的には，若い世代は大きなマーケットであると共に，デザイン的な感覚にしても全く新しいタイプといわれています。

したがって，このような若い世代の実態を具体的につかんで，世代のギャップを橋渡しすることも或る種の団体の責務のひとつともいえよう。

とくに，(1)に関しては，それぞれの世代の背景となった時代の流れを無視することはできないでしよう。

明治27年（1894年）の日清戦争をはじめとし富国強兵に終始した半世紀。まさに，今日の古い世代の精神的にも生活的にも大きな背景となっています。

物みな節約の時代であり，代用品の時代といえましよう。

これに比べて，戦後は消費の時代。一応は豊かな生活背景をもっています。

これほどに明確な時代の格差は，わが国の歴史上にもかってなかったものであるといっても過言ではないでしよう。そして，ものの考え方が生活背景や生活様式と無視できない関係にあるともいえましよう。

ここに思い起すことは，さきごろ来日したスイスの心理学者J・ピアジェ氏のその生活態度と思考様式とであります。

彼は，現代心理学に新風を吹込みつつある天才的な大学者の一人であります。その著作には，心理学，生物学，論理学，認識論の諸分野にわたり，数百の論文と30冊以上にわたる独創的な業積を生み出しており，その背景となりその秘密といわれるものには，まさに規則正しい生活の中にあるといわれています。

日課は，朝早く，時には4時頃に起床し，直ちに筆をとる。午前中は講義や会合。午後は，長時間の散歩。夕方は読書，夜は太陽が沈むと同時に床につくなど。

来日した74才の巨大な老軀（ろうく）は，京都嵯峨野の山々を大いに歩きまわったとか。

「本を読む前に，問題を考えることが好きだ」と。山を歩くことは，現在直面している問題を考えるための手段であって，アルプス山中の山々が彼の業績を仕上げているといわれています。

万博も日本庭園にも興味なく，山々に異常な執着をもつスイス的山男としてのピアジェの平凡かつ独特な生活にこそ，創造的思考の芽が万べんなく含まれているといえよう。

今日，創造性の開発が叫ばれている一方，何を考えているかわからないと喝破されている若い世代などを知る手がかりとしては大いに啓蒙される点が多いといえましよう。

本来，人間の創造性は，その個人の生活様式またその生活背景と密接なつながりをもって結びついている点に着目すべきではないだろうか。

ひるがえって，今日の世代のギャップを知るために，アメリカではこれらの専門機関が生れており，ギルバート・ユース・リサーチ，ナショナル・スチューデント・マーケティング，クラス・スチューデント・サービスなどがこの種の組織の一例であります。

このように，古い世代から若い世代に向ってのアプローチによって，今日の若い世代の特徴は次のようにあげられています。

①自己主張のできる仕事につきたい。

②社会的に意味のある仕事に関心をもつ。

③会社に対する忠誠よりも，専門に対する忠誠を重視する。

今日の若い世代は，とくに個人中心主義の考えであるといわれながら，一方では，この人生に賭けた生きることへの自己の忠実な叫びをもっているともいえよう。同時に，若い世代は，己れの生きるあかしの中にたゆまぬ創造性を内蔵しているのであります。

単に，若い世代におもねることが古い世代の切り札であってはならない。

協会に何故参加するか。

協会に参加するメリット（利点）は何か。など。

これこそ，参加することにより次の体制への生きがいを感得し，新たな綱領の中に生きがいの体制を発見せしめ，社会へのインパクトとしてもその存在意義を力あらしめるものとしてゆかねばならない。　（尾上孝一）

ヤマギワ国際照明器具コンペ '70について

照明とは「光を生活に役立てる技術」であります。光と人間の生活の結びつきは，人類の歴史と同時にはじまっています。ほら穴などの「あかりとり」にはじまった照明の歴史は，現在ではインテリアデザインやスペースディスプレイの分野に，照明器具の存在が一段と脚光を浴びています。

従来，日本人は照明については，ほとんど関心をもたず，いまだに一室一灯で間に合うと考えている人が多いのです。これには，日本家屋独特の開放性などが，「光」をあまり必要としなかったことにも原因があります。

しかしながら，生活の洋風化が進んでいる今日，日本人の照明に対する考え方も，しだいに変わってきており，生活空間の中で，照明器具の果たす役割の重要性も認識されてきております。

照明の先進国は，ヨーロッパ——特に北欧であります。日本の照明を世界の水準にまで引きあげたい——これが3年前に「ヤマギワ国際照明器具コンペ」を開始した理由ともなっています。

人間の求める光は，単なるあかりでなく，豊かで，あたたかく，美しく，生活をふくらませる光であり，そうした未来の光を広く世界中から求めているわけであります。

こうした意図をもった「ヤマギワ国際照明器具コンペ'70」は，すでに7月1日に応募を締切り，567点の応募作品を得ました。うち海外からの出品は42点であり，これらの作品は，10月13日の最終審査で入賞作品4点と佳作4点が決定され発表されました。

コンペ'70の概要は次の通りです。

(1) 入選者および入選作品

「Under Construction」

金賞（50万円）菅　泰孝　21才
鎌倉市大町4-13-24
慶応義塾大学インダストリアルデザイン研究会

「Oh! Full Full」

銀賞（10万円）林　通孝
杉並区久我山5—35—20 第2福寿荘
デザイナー

「Pack in Light」

銀賞（10万円）KAINSグループ
（代表　柴田知彦）
豊島区目白4—10—2
早稲田大学大学院

「Sticker Hold」

銀賞（10万円）白石義紘　26才
新宿区中落合2—13—20米窪マンション
三越商品研究室
鈴木了二　26才
練馬区豊玉南1—10
槇野総合経済事務所

佳作　LEUNG DO-YIN
20, TSUNYUEN ST. 3/F
HAPPY VALLEY HONG KONG

佳作　速水紘八郎　29才
神戸市東灘区永平町2—3—9
建築環境デザインルーム

佳作　土居隆弥
港区赤坂6—2—6
会社員

佳作　倉又晴男　21才
北区中十条1—3—4
日本大学芸術学部

(2) 審査員

審査委員長　丹下　健三
審査委員　亀倉　雄策
仝　上　剣持　勇
仝　上　栄久庵憲司
仝　上　磯崎　新
仝　上　伊藤　隆道
仝　上　ジョージ・ネルソン

(3) 発表・授賞式・記念講演会

入選作品は，「新建築」「JA」で発表され，記念講演会が昭和45年10月17日，日経ホールでジョージ・ネルソン氏を迎えて開かれました。

(4) 応募状況

応募状況については，国内，国外とも次のようになっておりました。

① 職業別

学生	96人
デザイナー	86人
会社員	56人
建築家	91人
公務員	6人
大学院学生	5人
その他	15人
不明	27人
合計	382人

② 年代別

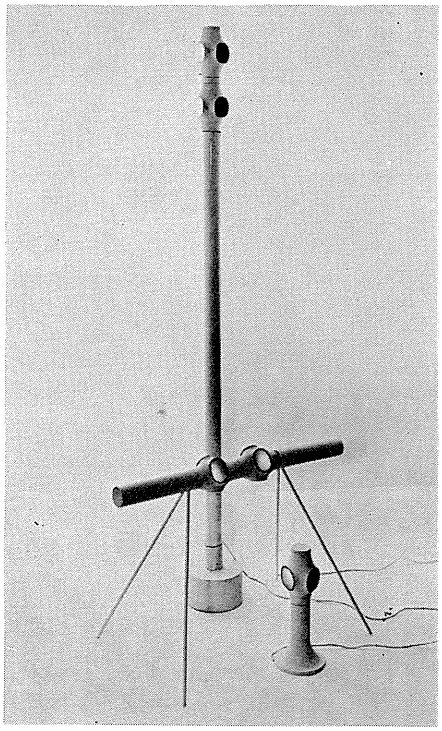
10代	12人
20代	321人
30代	28人
40代	2人
不明	19人
合計	382人

③ 性別

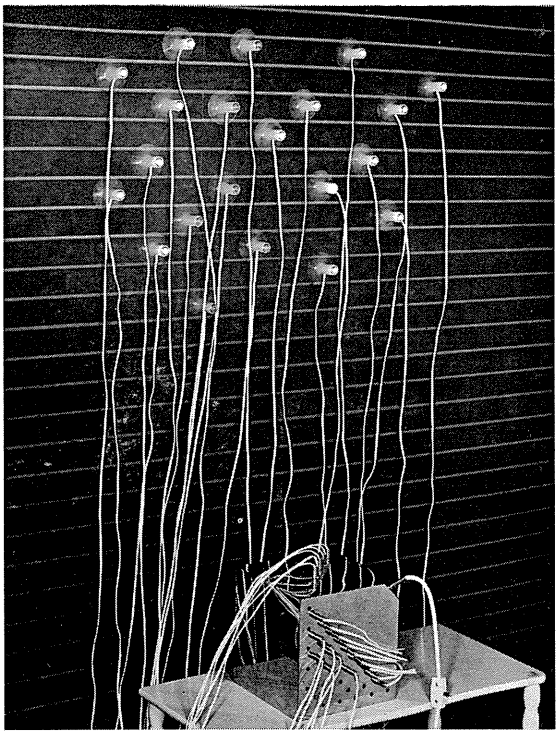
男子	337人
女子	33人
不明	12人
合計	382人

④ 国内各県別

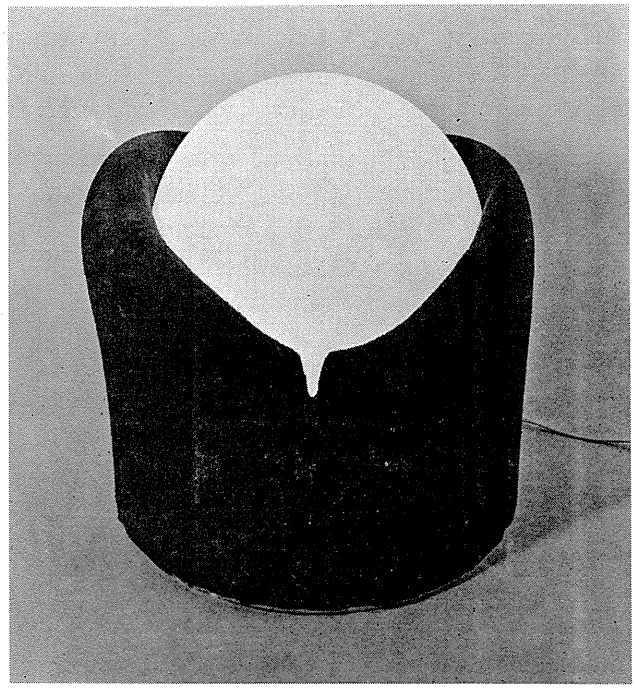
	出品点数	出品者数
①東京	267	197
②神奈川	64	50
③大阪	47	38
④愛知	40	17
⑤兵庫	24	12
⑥京都	19	12
⑦千葉	15	10
⑧埼玉	8	8
⑨福岡	8	6
⑩熊本	5	5
⑪静岡	4	4
⑫北海道	4	4
⑬鳥取	3	3
⑭山形	3	2
⑮岡山	2	2
⑯広島	2	2
⑰茨城	2	2
⑱和歌山	2	2
⑲山口	1	1
⑳山梨	1	1
㉑香川	1	1
㉒石川	1	1
㉓奈良	1	1
㉔福井	1	1
合計	525	382



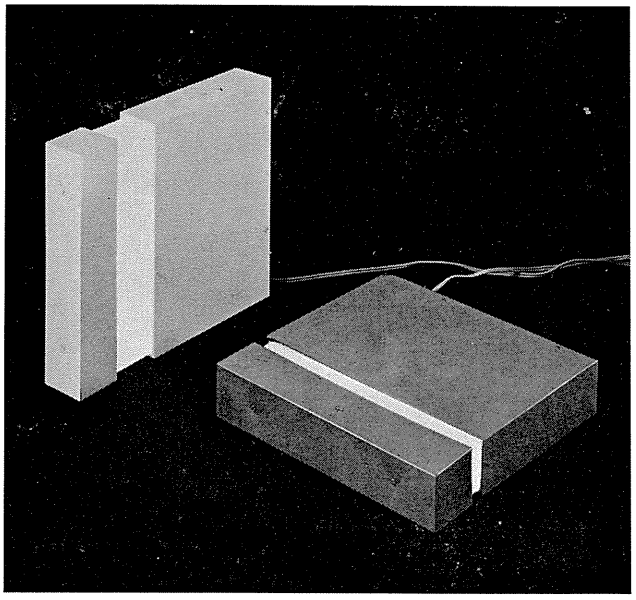
＜金賞＞ “UNDER CONSTRUCTION”
菅　泰孝　　21才
鎌倉市大町4—13—24
慶応義塾大学
インダストリアルデザイン研究会



＜銀賞＞ “STICKER HOLD”
白石義紘　　26才
新宿区中落合2—13—20 米窪マンション
三越商品研究室
鈴木了二　　26才
練馬区豊玉南1—10
槇野総合経済事務所



＜銀賞＞ “OH! FULL FULL”
林　通孝
杉並区久我山5—35—20 第2福寿荘
デザイナー



＜銀賞＞ “PACK IN LIGHT”
KAINS グループ（代表 柴田知彦）
豊島区目白4—10—2
早稲田大学大学院

---

⑤　海外の国別

（国名）	（出品者）	（出品点）
①ドイツ	1	11
②デンマーク	2	2
③オーストラリア	3	8
④アメリカ	6	6
⑤オーストリア	1	3
⑥インド	2	2
⑦イタリア	1	8
⑧ニュージーランド	1	1
⑨ホンコン	1	1
合　計	18名	42

住宅産業研究開発委員会発足！

昭和44年度より，建設・通産の両省は政府の住宅政策の一環として，住宅産業の育成と振興を強力に押し進めようとしています。

これに呼応して，既存の住宅関連企業は勿論のこと，基幹産業の大手企業・商社も新らたに住宅産業への転換を計画し，企業のグループ化，提携化が進み，電気産業，自動車産業につぐべき膨大な産業機構へとふくれ上がることが予想されます。

生活環境の向上と産業の発展に寄与することを目的としている社団法人日本インテリアデザイナー協会としては，住宅産業の発展に重大な関心をよせざるを得ません。

昭和45年9月8日に開かれた社団法人日本インテリアデザイナー協会第3回理事会に於て，「住宅産業対策委員会（仮称）設置案」が提案され，理事会はこれを承認し，担当理事として白石副理事長をすいせんしました。

ついで10月26日に同委員会の準備委員として，白石副理事長，坂田理事，箕原，三輪各委員が集まり第一回の委員会が開かれました。

主として委員会の構成，方向性，事業内容などが検討されましたが，先づ今年度は資料・文献の集収を当面の事業とし，資料の公表，研究会，講演会などによるインフォーメーションの交流を会員相互のみでなく都市計画家，建築家，工業デザイナーその他の研究者などと緊密にすることなどが話し合われた。

参考資料

昭和44年に建設省住宅局から出された「住宅生産工業化の長期構想案」の中で，住宅産業のビジョンについて次のように述べています。

『住宅の生産と供給の産業構造を新らたに住宅産業の名のもとに変化させる大きな力となっているのは，住宅の需要構造の変化と，住宅の原料・材料の供給構造の変化とがあげられる。

前者の需要構造の変化は特に住宅産業の成長性を示すもので，経済成長に伴なう所得水準の向上により，食費への配分は低下し，被服費，住居費，教育費，娯楽費への支出割合が多くなり，所得弾力性では住居費が，最も大きいので，わが国の産業は教育，娯楽に関連した産業とともに，住居に関連した産業にその重点が移って行くことが充分に予想される。

後者の供給構造の変化については，今までの住宅生産においては，従来，木材が主たる材料であったが，今后は有機化学工業などの生産物に転換することが明らかである。

したがって広範囲の建材産業が，住宅産業の基礎を形成しよう。

産業構造の変化を決定する要因として，これら二つの他に，労働力の量と質の不足があり，このことは必然的に住宅生産が現場生産の現状を，部品の工場生産による組立を中心とした生産体制に変えることになる。

また，資本力及び企画力等の観点からみれば，従来の零細な建設業は，産業構造の変化の中心にはならないことが明らかである。

今日，既に電気産業，自動車産業などに代表される先進的な産業がそうであるように，自らの技術開発によって新製品を生み出し，これを大規模な広告宣伝によって，自ら需要を開拓していくといった自力的，能動的産業活動を行うものが中心となって産業構造を変化させていくことになろう。

ところで住宅産業の内部構造は如何なるものであろうか。

住宅の生産・供給の過程に従いその業務を分類すると，

イ．宅地開発。
ロ．コミュニティー施設供給。
ハ．原材料生産。
ニ．部品，設備器具製造。
ホ．組立，施工。
ヘ．需要開発（宣伝，広告を含む）
ト．販売。
チ．賃貸経営。
リ．住宅金融。
ヌ．アフターサービス。
ル．不動産周旋
……となる。

これらの業務のうち，原材料生産及び住宅金融を除いた業務を住宅産業の業務とし，原材料生産及び住宅金融は、重要な住宅関連産業の業務とすることが最も常識的な分類であろう。

住宅産業においては，原材料生産及び住宅金融の業務を除いたとしても，その他の全ての業務を企業内で行えるような巨大企業が出現することは，住宅産業の複雑さと，住宅市場の多様性から判断して，まず考えられない。

したがって，これらの業務のうち，単一，又は複数の業務な行なう企業群が最も効率的に生産活動を行なえるような連携のあり方を探求していくことが重要となってこよう。

一般的にはイ.宅地開発，ロ.コミニュティー施設供給の業務は，大規模化するとともに，ハ.原材料生産から，不動産周旋にいたるまでの業務のうちのいくつかと一体化することが必要であり，またハ.原材料生産からル.不動産周旋までの業務はそれぞれ専門化，分業化するとともに，全体としては有機的に機能するような業務間の結合が必要である。

住宅産業においては今后，需要の多様性に技術的に対処するための部品製造，組立の業務，生活環境施設の整備を実現するコミュニティー施設供給の業務，住宅需要の創造，確保，集約化を司どる需要把握の業務などが重要となっていき，特に需要把握の業務は，住宅需要者と生産者の間に入り，いわゆるチャネラーとして，市場条件を生産に反映させるシステムを編成し，住宅産業全体のリーダー的存在となっていく可能性を持っている。

部品製造，組立業務は住宅の場合は，かならずしも，付加価値が大きくなく，輸送及び組立が地域的に制約され，かつ技術進歩の速さと，需要の多

様性に効率よく対応する必要があるため，生産単位としてはかならずしも現在の自動車産業のような巨大性を必要とせず，むしろ小規模集団を統合管理するほうがよいということも考えられる。』

以上が「住宅生産工業化の長期構想案」の住宅産業のビジョンの項を多少理解し易くなるように手を加えたものですが，この中で指摘されているように今までの住宅建設の一品生産的な産業規模や，われわれに直接関係のある，家具などのインテリア産業の産業規模などに比べると，気の遠くなりそうな巨大さであり，それだけにどこから手をつけてよいかわからないような，戸惑いを感じます。

さらに，「住宅生産工業化の長期構想案」の中では住宅産業振興の具体的な対策として次のような項目をあげています。

(1) 研究・開発の促進
　(イ) 既成市街地内における中高層住宅の工業化工法の開発
　(ロ) 住宅用部品の開発
(2) 民間関連企業の育成
　(イ) 民間デベロッパーの育成
　(ロ) 住宅及び部品製造メーカーの育成
(3) 住宅性能標準の策定
(4) 技術評価機構の整備
(5) 建築技術者及び技能者の教育
(6) 消費者金融などの拡充
(7) 関係行政組織の強化・充実

以上の対策の外にわれわれデザイナーとして非常に興味ある問題として「性能発注」について次のようにのべています。

『（総合的工業化促進策としての大規模住宅地開発の性能発注）

(1) 性能発注の意義

従来の住宅建設においては，施主は自らの組織内又は外部の建築家によって設計図書を作成し，これによって注文し，生産者はこの設計図書通りに生産することが一般的であった。

しかし，最近のように技術開発が急速に進み，当然の結果として生産技術に関する蓄積が専ら生産者側において行われるようになると，従来のような方式は技術の進歩にとって大きな障害となるに至った。

そこでこの隘路を打解するためには，住宅生産においても，あたかも飛行機などの発注のように需要者は注文しようとする住宅に備わるべき要件（性能条件）のみを示すことにより発注し，住宅の具体的生産の方法はむしろ生産者側の技術開発に委ねる方法をとることが必要である。

また，需要者の立場からみても，こと細かに生産方式を指定することが必ずしも本質的な目的でなく，発注の際に示した条件を完成された住宅が満していれば充分である。

このような観点から生産者に，主として技術開発競走と生産体制の合理化を行なわしめるために公的住宅建設の一部について新しい**性能発注方式**を実施する。』とのべてあり又その具体的な内容として，

『(2) 性能発注要綱案

a. 住宅開発は事業主体が行なうが，基本的な工事のみ行なう。
b. 事業主体は，建築物，公共施設などの設計及び団地設計に関し合理的な設計条件を設定する。但し設計条件はなるべく自由に技術開発が行なわれるように設定すること。
c. 事業費の算定にあたっては，通常必要される事業費に研究開発費を加算するものとする。
d. 事業量及び施行期間は，新技術を企業化するに充分な規模と期間とすること。一発注単位の事業量は3,000戸以上とし，施行期間は3年以上とする。
e. 施行者は，設計及び生産について一貫して責任を受うことができる体制にある企業及び企業の連合体であること。
f. 事業主体は，上記の基本的条件に基づき施行者を公募する。
g. 施行者の選定は関係各界の代表など学識経験者からなる委員会により施行者及びその提出する計画図書を審査して行なうものとする。
h. 施工者の選定は，単なる価格競走によらずに主として開発される技術の合理的な評価によって行なうものとする。』

以上により住宅産業のきわめて大まかなアウトラインを理解していただくための資料として文献の紹介をしましたが，文中で会員のみなさんも気付かれたように多くの重要な問題を含んでいるように思います。

自由経済の中で企業間の競走はますますはげしくなり，住宅産業も当然のことながらその渦中に巻き込まれることは必至であると思います。

企業の利益追求のための犠牲として，住宅産業がまな板に上げられようとしている現況を黙視しているわけにはいかず，又技術偏重の行政施策がもたらす結果も眼に見えるような気がします。

住宅産業研究開発委員会は当面の事業として，業界の現状把握とその方向性を知ることが中心となりますが，将来は出来ればインテリアデザイナーとしての具体的な提案，プロジェクトチームによる計画案の発表などの事業も予算の裏付けのもとにやって行きたいと思っています。

興味と関心のあるみなさんの委員としての参加を強く望んでいます。

今年中は無理だとは思いますが，少くとも一月に一回集って意見の交換を行いたいと思いますので，御希望の方は事務局へ申し込んでいただければ，委員会の開催その他の連絡をいたします。

――住宅産業研究開発委員会――

サキガケ

魁育児家具株式会社

東京都中央区晴海3－10JFC　TEL (03)533－1261
営業所／札幌(011) 811－4356・関東 (03) 608－0543
大阪 (0729) 62－3865・九州 (092) 74－6 9 9 3

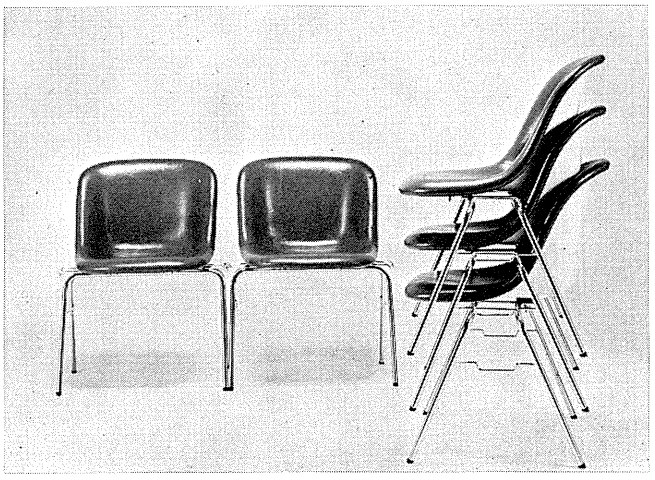
東京都千代田区有楽町1－14

イスのコトブキ

03(591) 1311(代)・〒100

KOTOBUKI

弊社は我国家具産業界のパイオニアとして創業以来50余年に亘り、建築界と共に歩み続けるイスのトップメーカーです。経済的な高級家具をモットーに材質の吟味、デザイン・機能面の研究に特に力を入れ、弊社製品の殆んどはオフィス、劇場、学校、体育館、スタジアムをはじめ公共施設に採用されています。



新事務局員紹介

10日の菊の感がありますが，7月中旬より新事務局員として勤務されている清水代美子さんを紹介します。

本年3月に武蔵野美術短大・生活デザイン科を卒業した可愛いいお嬢さんですが，専攻はエディトリアル・デザイン，一本芯が通った性格は，学業ばかりでなく・学内ゲバ騒ぎから GO GO 迄適確にマスターした証拠だと思います。

勤務内容は事務ばかりでなく専攻を生かして，会報の編集にも参加して貰っています。山に乗り上げかかっている会報の内容向上を期待して下さい。

突然原稿依頼におじゃまするかも知れません。どうぞよろしく。

● 編　集　後　記

去る8月18日，大阪に於て初の合同委員会が行われ，大阪，東京の間で発行分担をする事になりました。これによって，発行計画が先行すると共に，巾広い情報が得られる様になると考えます。種々の催しの報告と共に，会員個々に互る研究活動を中心にメリットのある広報活動にして行きたいと考えます。45号では編集の都合により月例会の報告が遅れ，少々新鮮味を欠いてしまいましたが，46号ではジャンボジェットの興味ある記事を予定しております。47号では，月例会報告として新しく発足した住宅産業委員会の状況，48号は，大阪支部初の発行が予定されています。　＜中島研一＞

機関誌・JID・No. 7・Vol 45　昭和45年12月発行　発行人　豊口克平　編集　社団法人日本インテリアデザイナー協会
発行所　社団法人日本インテリアデザイナー協会　東京都渋谷区神宮前1—14—34 森ビル（〒150）電話　403—6647
広報委員会　委員長 三宅征郎　部員（関東）泉修二・尾上孝一 織田武己・鈴木栄二・高橋岩夫・牧野達夫・矢田秀治
田中聰行・中島研一
（関西）上野忠之・尾畑祐司・南原七郎・本田安治・森岡正・村田博三　(K)